

神経科学を用いた知的能力の増強

植原亮

(東京大学；独立行政法人科学技術振興機構、RISTEX；日本学術振興会特別研究員 DC1)

神経科学の発達により、注意や記憶といった認知機能、あるいは運動機能の神経科学的メカニズムが解明されつつある。これと歩調を合わせる形で、こうした機能に関わる脳の不全や障害を治療することを目的とした薬物や外科的手術も広がりを見せている。こうした薬物や技術がもつ潜在的な可能性は、単に治療にとどまるものではない。というのも、これらは健全な人間の知的能力の増強に応用される可能性があるからだ。すなわち、服用すると、集中力が高まり、記憶力が向上する薬物が出現する可能性がある。あるいは、脳に埋め込むことで記憶力を増強するチップを生み出すことができるかもしれない。さらに、脳とコンピュータを接続し、運動能力や知覚能力の拡張を目指す研究も盛んであり、実用化される可能性がある。

現状における副作用のリスクなどの技術的な障壁は、やがて突破されるものと考えられるため、神経科学に基づくこのような知的能力の増強には一定の現実味があると言ってよい。そして、これが将来的に現実化したとすると、多くの人間が知的能力を増強した社会が出現することになるだろう。

このような知的能力の増強には多くの倫理的問題を引き起こすように思われる。ただちに考えられるのは、能力増強の恩恵に浴することができる層は限られており、そのため格差の助長につながるのではないかと、といった社会的影響に関する倫理的問題である。すると当然、こうした問題点に基づいて、能力増強に反対する見解が表明されることになる。

しかし、神経科学に基づく能力増強にはもっと根本的な倫理的問題が見出されるのではないかと疑念が浮上するだろう。その疑念を支えているのは、そうした能力増強が従来の人間観に変更を迫り、倫理の基盤そのものを掘り崩すように思われるという直観にほかならない。とりわけ、能力増強が著しいものであったときに、増強の前後で果たして同じ人物だと言えるのか、そのように言えない場合には、知的能力増強はむしろ自己破壊的な技術なのではないか、という問題が根本的である。というわけで、増強に対しては、ひとつにはこの自己破壊の可能性を論拠として反対の立場が表明されるだろう。もちろん、容認派からは、こうした可能性を否定する立場が提示されることになる。

本発表では、反対派のとりうる複数の理路を提示しそれを吟味することを目標としたい。そのために以下では、増強技術が自己破壊的であるとしたら、それはどのような内実を指す主張でありうるのかということを中心にしながら、その倫理的含意を汲み出すことを目指す。そこで、自己観に関して大きく二つの見解として、実体的自己観と仮構的自己観とを設定し、それぞれについて神経科学的増強がもたらしうる影響について検討するという道を進むことにする。実体的自己観とは、自己が自然的基盤のうえに成立する対象であ

ると捉える見方を指す。これに対して、仮構的自己観では、自己は物語を自分や他者に語ることによってそのつど紡ぎ出されるフィクションとして捉えられる。

まず実体的な自己観のもとでの影響として、認知能力の増強が自己の明確化という一見したところ肯定的な結果を生じる場合と、自己の変化の速度を自然な変化以上に大きくする場合などが挙げられる。後者の場合に、たとえ実体としての自己が確保されるとしても、日常的な実践の場面では仮構的自己観に接近せざるをえなくなるだろう。

では、仮構的自己観のもとでは自己の破壊とは何を意味するだろうか。ここでは、物語の構築には一定の制約が課されるが、神経科学に基づく知的能力の増強によって身体の実験が目まぐるしく変化する場合に、この点が損なわれるのではないかと問いたい。これが正しいとすると、この場合、物語という一貫した流れのうちに自己を紡ぎ出すということができなくなるという意味において、能力増強は自己破壊的だということになる。

このことは以下のことを含意する。まず、増強が普及することはある程度やむなしとしても、このように事態が進行することを押しとどめたいのであれば、物語を語る能力をより意識的に、あるいは人為的に向上させるような教育戦略・教育プログラムが要請される。しかし、それがかなわぬ場合には、我々の日常的な実践に根本的な変化がもたらされることになると思われる。すなわち、我々は自己を物語によって紡ぎ出すことによってなされる素朴心理学的な実践を捨て、代わりに認知科学や神経科学の語彙に基づく日常的な行為実践を行うようになるかもしれない。あるいは、より深刻な場合として、そもそも素朴心理学は我々の生得的なあり方として放棄できず、それゆえ新しい実践も成立しえないという、日常的な実践が崩壊している事態が現れるという可能性がある。

さらに、反対派の主張を補強することができる。上で見た道筋の中でも、自己の明確化につながる場合など一見したところ問題のないように見える事例においても、我々の現在の価値システムと衝突する可能性を指摘することができるのだ。

このように、実体的自己観であれ仮構的自己観であれ、どちらの自己観に立った場合でも、神経科学に基づく知的能力の増強は、我々の日常実践のあり方そのものを変化させ、場合によっては破壊してしまう可能性をもつと結論できる。だがこの段階では、単にそうした可能性を指摘するにとどまらざるをえないのも確かだ。そこで、上にあげたような可能性がどこまで現実性をもっているのかを見積もる必要がある。そのために、まずは、蓄積が進む神経科学の知見を注視しながら、それが自己観に関してもつ意義について吟味を重ねていく必要があるだろう。それとともに、我々の文化・社会がもつ価値システムを明確化しておくことも重要である。そのうえで、神経科学に基づく能力増強が、自己観やそれをめぐる日常的な実践、その他の諸価値に関してもたらさうる影響についてさらに何通りものシナリオを描き出して、どのシナリオが現実的な可能性をもっているのか、どのようなシナリオならば我々の社会が受容可能なのか、ということを検討していく必要があるだろう。